

想

随

沙魚つり

魚津 郁夫

秋晴れの一日、八朔には不知火がよくみえるという海辺で、うまれてはじめて沙魚(はぜ)つりをした。海岸をはしる舗装道路でせきとめられて、海の反対側に堀のような形になった場所で、釣糸をたれると、たちまち手がたえがはつて竿がしなつた。二時間たらずの間に五十四ちかくのどらばぜをつりあげたが、満潮のころあまりつれなくなつたので、今度は突堤にでて、まはぜをつつた。海面を細く青く光る魚の群が泳いでいて、これはさよらだという。小さい釣針にとりかえると、これまた面白いようにつれた。沙魚と思つてつりあげたはずが、頭と内臓さえとれば、安全で味は絶妙であるという。

こうして、熊本市内からバスで一時間出ただけで、いろいろな魚が豊富につれるというところは、初心者にとつて胸のおどる経験である。もともと、南紀(和歌山県)の海岸で育つた私は、つりははじめてというわけではない。子供のころ、川えびやふなむしをとつて、波のうちよせる磯でぐれ(くろ)などをつつたことを思いだす。故郷の家も住む人がいなくなつて、もう十年あまり帰らないが、

小川も汚れて、えびやうなぎなどもすっかり姿を消したという。子供たちはもうつりをすることもないのであるか。最近では、大阪や名古屋あたりから釣り客がおしよせて、それを目当ての大きかりな釣り船がでてきているという。

それで地元が潤うなら、それはそれで結構なことだ。しかし釣り師たちは、大層な装備で、ぜいたくな餌をばらまき、いずれ魚をすつかり釣りあげてしまふか、さもなければ、かつて子供たちが使つていた素朴なしかけや餌などには見むきもしないすれた魚にしてしまふことである。

昨年の夏、知人につれられて、天草の羊角湾にちぬをつりにでかけたことがある。蛹(さなぎ)をつぶした団子でえびをつつんでつるのだが、毎日毎日釣り師がそれぞれバケツに何杯もの蛹をなげこむわけで、海底はさぞ蛹とえびがうず高く堆積しているのだからと思うと、すっかり嫌気がさしてしまつた。

こうした大がかりなつりは、一種の環境破壊ではなからうか。様々なプランクトンがあつて、それを食べる小さい魚があつて、さらにそれを食べる魚があつてというような天の配剤を人間が横からこわしているように思う。レジャーに釣りを楽しむ気持は十分わかるつもりだが、たくさんつるためには手段をえらばないというのは、ががつがつして詩情がない。

今度沙魚つりにでかけた海辺には、こうしたレジャー公害がまだおしよせていない。地元に住んでおられる白髪のK先生は、餌にするまむしも近くの浜でとられるという。釣り具店の養殖まむしよりも沙魚はこちらの方を好むようですとのことで、この沙魚はまだすれていないのだから。

地元が発展するためには、工場や観光客や釣り客を誘致することも必要であろうが、海も山も、不知火のみえるあの海辺のように汚染されないうまにまに残つてほしい。

(熊大教授)

愛をうけて

倉田 千恵子

幸か不幸か私は生来の一人っ娘で、兄弟の愛を知らないためか、一生を友達やまわりの人に甘えてきたようなものである。

ふり返ると、戦後貧しく生活に追われた時代にも、互いに励まし合うけなけな友達にことかかなかつたし、仕事には仕事の友、趣味には趣味とおしての友と、数え切れない恩恵に浴しました。親許から離れて、孤独な己れが一体何をめあてに生きていくのか、と切実に祈

りながら生きて日にも、殆んど宗教的に近い友情の意識があつて、まわりの自然からも、人からも、さらに大きな世界の中からも、私を私たらしめてくれるものが必ずあると信じる事によつて、支えられて来たような気がするのです。

苦しい戦争の記憶の中でも、きらきら光つて見えるものはむしろ他人の愛でした。

終戦前夜、医なく薬なく死なせた幼児の小さな棺(ひつぎ)のみかん箱も、裸足で暮した戦災の数日に下さつた一足の下駄も、一枚の紙にも、他人の愛が光っていました。

そう思うと、変遷する時代の流れが激しい抗いをおこし、文明のどどの詰まりの恐ろしさを目のあたりに見せてくれようとも、底の底の静かなところで、人を人たらしめている本流が必ずあつて、時が来たなら暗い思想をくつがえしてくるものと、信じないではいられないのです。

私の仕事場の屋根の上では、風がさわぐたびに小石のような音を立てて木の実が落ちます。鳩たちが楠の大木の枝から飛び立つときには際立ってその音が聞えます。殆んど小屋と言つていい小さな私の店のまわりは、降りしきる木の葉で敷きつめられていますが、こんな良い秋にあつたのは始めてです。

歌をつくろうと山野を歩きまわり、詩のエロスに逢おうと終夜ねずに苦しんだ

晩にも見出せなかつた秘密が、こんな呑気な場所にあるとは。

明日は私の誕生日。長い道のりでしたが、長すぎたとは思いません。思いがけぬ道から道へどうつづるか、今からも楽しみにします。私の生きていく間、恐らくは私を支えて呉れる多くの愛を信じて、私らしく生きていく他はないと思ひます。

(主婦・詩人)

小さな心

兼瀬 哲治

秋が終わりに近づく、農家は冬仕度を始め。風が筋に冷たい日、母が畑に穴を掘って、大根を埋めていると、それを見ていた近所の子が「まだ大根ないくと太な」と聞くので、母は笑いながら「冬、凍らんとつたい」と答えた。「どうして凍らんと」と土の中はぬかかけん。するとこんどは別の子が「すんなら夏は?」「夏は穴ん中はずすしか」「穴ん中はええな」をれまで黙つて聞いていた父が口をはさんで「穴ん中はええけ、死んでから穴ん中にいた人達ちや出てこらつさんとた」。

ある家で子供に「ご飯」と言つて出すようにしつづけていた。ある時、その子は母親に「かあちゃん父ちゃんがお飯でも言いなさんとしようわかるな」この二つのお話を聞いたとき、こみあげてくる愉快な笑いをおさえきれなかつたものである。おデコをこずいてやりたいような、両手で頬をはさんでやりたいような思ひであつた。

真白い画用紙のような子供の心、その心に子供達はいろいろな経験をしながら、画用紙にクレヨンで絵を画くように育つて行くのであろう。

最近の子供の育つ環境も広くなつた。保育所もその一つである。私は役場で衛生の仕事をしているので、子供達には予防接種等で接することが多い。私の顔を見たばかりで泣き出す子には、こちらがどぎまぎして、気の毒な思ひをすることがある。その点、保育所に行つていく子は泣く者が少ない。一列によく並んで、腕をまくり、しんみように待っている姿は健気でもあり、保育所の良さを認めるときでもある。

ある新聞に「保育所は社会性を育てる」とあつた。そのとおりだと思ふ。彼らが大きくなつても、対人関係で悩むことは少ないであらう。仲間の中に自然にとけ込み、その中で自分の意見はつきりと意見を人に育つて行くことだろう。

しかし、良く考えて見ると、私達は保



(清和村役場勤務)